『堤中納言物語』「貝合」の世界

井上新子

はじめに

『堤中納言物語』所収の「貝合」は、恋を求めて彷徨する蔵人少将が偶然足を止めたある邸に女童の導きによって侵入し、明日に迫った貝合の準備に奔走する童たちの世界を垣間見、劣勢の姫君方を密かに援助するに至る物語である。継子の姫君と異母姉にあたる姫君とが貝合をめざして競い合い、継子の姫君方が圧迫される構図は、継子いじめ譚を想起させる[1]。また、蔵人少将が観音を装い継子の姫君方を援助するあり方は、観音霊験譚との繋がりを想起させる[2]。継子いじめ譚や観音霊験譚が当該物語の趣向の根底に深く関わっていることは、当該物語の大きな特色として見逃せない。こうした話型のみならず、先行する文学作品を「貝合」がいかに活用し、新たな物語を形成したのか、具体相のさらなる掘り起こしが求められてもいよう。

一方、細部の物語本文の読みについて、当該物語は他の『堤中納言物語』と同様、議論の少なくない作品である[3]。個々の本文をいかに校訂し解釈するかによって、物語に形成された事実関係が変わってしまう。それは物語世界の全貌の理解にも大きな影響を与えてしまうだろう。個々の本文の読みも、物語世界を捉える上で不断に検証し続ける必要がある。

稿者は、「貝合」冒頭部分と『源氏物語』若紫巻の一場面とは密接な繋がりが存すると考えている[4]。これを起点として、若紫巻において使用された印象的な文言が、さらに趣向を加えたかたちで「貝合」に意図的に鏤められたと推測している。ここに、単純な模倣[5]にとどまらない、「貝合」の文学的営みを見出すことができると考えている。こうし

た視座から、「貝合」において形象された言葉の世界の一特色に迫りたい。と同時に、細部の物語本文をめぐる読みも物語世界の理解に不可欠である。すでに近年になって新説が提案されている個所や、稿者が疑問を抱いている個所について、私見を提示したい。これらの検討を通して、「貝合」の物語世界の解明をめざす。

一　若紫巻の源氏の朝帰り場面から

「貝合」冒頭へ

『源氏物語』若紫巻の以下の場面に着目する。

いみじう霧りわたれる空もただならぬに、霜はいと白うおきて、まことの懸想もをかしかりぬべきに、さうざうしう思ひおはす。いと忍びて通ひたまふ所の道なりけるを思し出でて、門うち叩かせたまへど、聞きつくる人なし。かひなくて、御供に声ある人してうたはせたまふ。

あさぼらけ霧立つそらのまよひにも行き過ぎがたき妹が門かな

と二返りばかりうたひたるに、よしある下仕を出だして、

立ちとまり霧のまがきの過ぎうくは草のとざしにさはりしもせじ

と言ひかけて入りぬ。また人も出で来ねば、帰るも情なけれど、明けゆく空もはしたなくて、殿へおはしぬ。

（①二四六～二四七頁）[6]

祖母尼君が他界してしまい、いよいよ心細い身の上となった若紫。その若紫邸を訪れた源氏の帰途のありさまを語る場面である。昨晩は霰が降り、風も吹き荒れる夜であった。幼い若紫を守り、実事なく朝を迎えた源氏の、風変りな朝帰りをかたどっている。霧が立ち込める「あさぼらけ」、途中、そこが忍び所であることを思い出した源氏は、女性宅の「門」を供の者に叩かせるけれども、反応がない。供の一人の声のよい者に「あさぼらけ」歌をうたわせた。

「貝合」の冒頭は、「長月の有明の月[7]」に誘われ、朝霧の中、恋の相手を求めて彷徨する蔵人少将のさまを語る。以下、引用する。

長月の有明の月にさそはれて、蔵人少将、指貫つきづきしく引きあげて、ただ一人、小舎人童ばかり具して、やがて朝霧もよく立ち隠しつべく、ひまなげなる

に、「をかしからむところの、あきたらむもがな」と言ひてあゆみゆくに、木立をかしき家に、琴の声ほのかに聞こゆるに、いみじううれしくなりて、めぐる。門のわきなど、崩れやあると見けれど、いみじく築地など全きに、なかなかわびしく、「いかなる人の、かく弾きゐたるならむ」と、わりなくゆかしけれど、すべきかたもおぼえで、例の、声いださせて随身にうたはせ給ふ。

ゆくかたも忘るるばかり朝ぼらけひきとどむめる琴の声かな

とうたはせて、「まことに、しばし、内より人や」と心ときめきし給へど、さもあらぬは口惜しくて、あゆみ過ぎたれば、（略）　（一オ～一ウ）

風変わりな朝帰りの源氏に対して、こちらはこれから女性との出会いを求めての外出である。ある意味で正反対の状況を語り取る両くだりである。けれども、朝霧の立ち込める中、ある屋敷の前で足を止め、その屋敷に住む者への挨拶として、男主人公の詠歌を供の者に「声」を出させてうたわせるという一連の設定が、二つの物語において共通している。これらの一致は、若紫巻の表現を「貝合」が受け継ぎ、冒頭場面が形成されたことを物語っていよう。

周知のように若紫巻は、実父・兵部卿宮によって引き取られる直前の若紫を、源氏が二条院へ密かに引き取るという展開になっている。若紫が実父に引き取られれば、兵部卿宮と同居する北の方によって継子いじめに遭う危機が予想されていた。これを回避したのが、源氏による若紫の引き取りだったとも言える。すでに言われているように、若紫巻自体が継子いじめ譚と深く関わる物語であった。「貝合」冒頭場面は、継子いじめ譚を変奏する若紫巻の一場面―言うまでもなく、この場面自体に継子いじめ譚は影を落としていないが―に多くを拠った表現によって形象されている。「貝合」もまた別のかたちで継子いじめ譚と深く関わる物語であることを考えると、注目した若紫巻引用場面との表現の一致は、単なる表面的な文飾レベルでの借用といった体のものではないと推測される。[8]「貝合」一編の構成に深く関わるものであったのではないかと考える。

二　若紫巻の表現や発想の断片の集積

「貝合」では、検討した冒頭場面に続き、蔵人少将とある屋敷の女童との出会いやユーモラスなやり取りが語られ

る。その叙述において、若紫巻の表現や発想を取り込み、変形を加え、作中世界の形成に活用しているとおぼしき個所が散見する。以下に、その女童とのやり取りの場面を掲げる。

（略）いとこのましげなる童べ、四五人ばかり走りちがひ、小舎人童、男など、をかしげなる小破子やうのものをささげ、をかしき文、袖の上にうちおきて、出で入る家あり。「なにわざするならむ」とゆかしくて、人目見はかりて、やをらはひ入りて、いみじく繁き薄の中に立てるに、八九ばかりなる女子の、いとをかしげなる、薄色の衵、紅梅などみだれ着たる、小さき貝を瑠璃の壺に入れて、あなたより走るさまのあわただしげなるを、をかしと見給ふに、直衣の袖を見て、「ここに、人こそあれ」と何心もなく言ふに、わびしくなりて、「あなかまよ。聞ゆべきことありて、いと忍びて参り来たる人ぞ。と寄り給へ」と言へば、「明日のこと思ひ侍るに、今よりいとまなくて、そそき侍るぞ」とさへづりかけて、往ぬべく見ゆめり。をかしければ、「なにごとの、さいそがしくは思さるるぞ。まろをだに思さむとあらば、いみじうをかしきことも人は得てむかし」と言へば、名残なく立ちどまりて、

（一ウ～二ウ）

随身にうたわせた詠歌に反応がないので、その邸を通り過ぎると、蔵人少将は人々が出入りしてなにやらせわしない家を発見する。ここで使用されている「童べ」や「出で入る」は、北山で源氏が垣間見た屋敷の様子を語るくだりにも使用されている。

きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。

（『源氏物語』若紫巻　①二〇六頁）

もちろん、この程度の共通点を根拠に両者の影響関係を云々することは早計である。けれども、先に見た朝帰り場面との共通点や、これ以後の物語本文に見出される共通する表現や発想の用例を一連のものとしてながめると、「貝合」が若紫巻の表現や発想の片々を集積し、物語世界を構築したことが了解されるのではないかと思う。

家の敷地に侵入し、たいそう茂った薄の中に立つ蔵人少将。そこへ、この屋敷に仕える女童がやって来る。八、九歳ほどの「女子」が「走る」という登場の仕方は、若紫巻北山の垣間見の、前掲の本文の直後に語られる若紫登場の場面を彷彿とさせる。

中に、十ばかりやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。髪は扇をひろげたるやうにゆらゆらとして、顔はいと赤くすりなして立てり。

（『源氏物語』若紫巻　二〇六頁）

「姫君」である若紫と女童とでは、身分や物語上の役割も大きく異なる。しかし平安朝の作り物語において、「走る」行為自体に言及したものが少ないこと、「走る」行為は平安の女性にとって異例のものであったこと[9]を勘案すると、「走る少女」が男主人公の視界に入ってくることを語る二つの表現の間には繋がりがあると考える方が自然ではないか[10]。

女童は、蔵人少将の「直衣の袖」を見て、侵入者の存在に気づき、そのことを無邪気に口に出す。一方、若紫巻においても、「直衣」が来訪者の存在を知らせるものとなっている。祖母尼君を亡くした若紫の許を源氏が訪ねたくだり。

君は、上を恋ひきこえたまひて泣き臥したまへるに、御遊びがたきどもの、「直衣着たる人のおはする。宮のおはしますなめり」と聞こゆれば、起き出でたまひて、「少納言よ。直衣着たりつらむは、いづら。宮のおはするか」とて寄りおはしたる御声、いとらうたし。

（『源氏物語』若紫巻　①二四二頁）

女童たちが、「直衣着たる人」から若紫の父宮の来訪を連想する。若紫もこれにつられて「直衣着たりつらむは」と、父宮の来訪を期待。実際は光源氏がやって来ているのであった。若紫巻の「直衣」のやり取りが、「貝合」の「直衣の袖」から侵入者に気づく女童の描写に繋がっていったと捉えたい。

蔵人少将が女童に声をかけるものの、明日の貝合の準備で忙しい彼女は早口でその旨を告げ、立ち去ろうとする。そこへ蔵人少将がかけた言葉「まろをだに思さむとあらば、いみじうをかしきことも人は得てむかし」により、女童は蔵人少将の言葉に耳を傾け、対話を継続することになった。目先の利益に心を動かされる女童の無邪気な様子がよく表れている。「まろをだに思さむとあらば」という蔵人少将の言葉には、尼君死去後の若紫邸を訪れ、幼い若紫とともに過ごそうと強引にふるまう、以下の源氏の様子が思い合わせられる。

手をとらへたまへれば、うたて、例ならぬ人のかく近づきたまへるは恐ろしうて、「寝なむといふものを」とて強ひてひき入りたまふにつきてすべり入りて、「今は、まろぞ思ふべき人。な疎みたまひそ」とのたまふ。

（『源氏物語』若紫巻　①二四三頁）

無邪気な若紫を説得しようと、源氏は「今は、まろぞ思ふべき人」と口にしている。相手を年端もいかない少女と見くびっての、大胆な言である。若紫と一緒に過ごそうとする源氏と、もう少し詳しい話を聞きたくて女童に声をかけた蔵人少将とはその目的が異なるものの、少女を篭絡しようと発せされた、「まろぞ思ふべき人」と「まろをだに思さむとあらば」とは、発想として繋がっているように思う。

以上見てきたように、「貝合」の蔵人少将と女童との交流を語る物語の叙述には、若紫巻における源氏と若紫の物語の表現や発想が影を落としている。ちなみに蔵人少将が目当ての姫君とするのは、女童の仕えるこの邸の継子の「姫君」なので、「貝合」では若紫の人物像を女童と姫君とに振り分けた造型になっているとも言えよう。若紫巻の表現や発想のかけらを取り込み、変形させ、「貝合」の世界が新たに形成されている。この営みは、模倣やパロディー精神とも異なる、物語の形成のあり方として捉えられよう。「貝合」冒頭において若紫巻の源氏の風変わりな朝帰り場面を継承する表現がある意味で唐突に配されたのは、以後展開される若紫巻を取り込んだ物語の叙述、継子いじめ譚を意識した物語世界を拓く先鞭の役割を果たしているのではないかと考える。読者は、若紫巻の、継子の不幸を幻影として背負う若紫と源氏の物語を一方で想起しながら、「貝合」を読んでいくことになろう。

三　異腹のきょうだいたちの競い合い

継子いじめの物語としての『源氏物語』若紫巻の叙述を一方で念頭に置きながら「貝合」を読むと、実母のいない姫君の不憫な境遇がより一層鮮明になってくる。若紫巻では、亡き母にかわり、祖母尼君や少納言の乳母が若紫のために心を砕くさまが繰り返し語られていた。「貝合」の物語本文を読む限り、そうした大人の保護者的な役割を果たす人物の存在は見当たらない[11]。

さらに「貝合」の継子の姫君をめぐっては、彼女を取り巻く周囲の人々の対立関係が明確になっている。蔵人少将

は女童から、異母姉妹と競い合う貝合の準備状況について教えられた。女童の発言からうかがえる事実関係については、従来説とは異なる解釈も可能ではないかと考えている。以下、久邇宮本でその該当箇所を掲げる。

あなたの御かたはたいふの君しゝうの君とかいあはせゝさせ給はんとていみしくもとめさせ給なりまろか御まへはたゝわかきみ一ところにていみしくわりなくおほゆれはたゝいまもあねきみの御もとに人やらむとてまかりなむ　（二ウ～三オ）

女童の仕える姫君の対戦相手の姫君[12]の味方として、「たいふの君しゝうの君」がいる。これに対して、女童の仕える姫君の味方は「たゝわかきみ一ところ」である。「たいふの君しゝうの君」については、従来「大輔の君、侍従の君」の字があてられ、対戦相手の姫君に仕える大人の女房と解されてきた[13]。「わかきみ」は「若君」であり、女童の仕える姫君の同腹の弟君を指す。女童の説明では、その「若君一ところ」と「たいふの君しゝうの君」とが対になっている。こうした言及の仕方を考慮すると、「たいふの君しゝうの君」は対戦相手の姫君の同腹のきょうだいである可能性はないだろうか。稿者は、「たいふの君しゝうの君」に「大夫の君、侍従の君」の字をあて、対戦相手の姫君の同腹のきょうだいと解したい。姫君たちの同腹のきょうだいたちもこの貝合の準備にそれぞれ加勢している構図として捉える。そのように解すると、元服後の「大夫の君、侍従の君」が加勢する対戦相手の姫君に比して、まだ元服前の弟君（後に「十ばかり」とある）のみしか味方のいない継子の姫君の劣勢の構図がより浮彫になろう[14]。

「大夫の君、侍従の君」と言えば、例えば『とりかへばや物語』に、

冠は童より得たまへりしかば、大夫の君ときこゆ。やがて、その秋の司召しに侍従になりたまひぬ。

（『とりかへばや物語』巻第一　一七七頁[15]）

とある。ヒロインである「若君」の元服後の動静を語るくだりである。元服前から五位を賜っていて、元服後、官職には就いていなかった期間に「大夫の君」と呼ばれている。その後「侍従」に任命されたとある。元服後間もない若い者たち、権門の子息たちを彷彿とさせる。若い者たちなので若輩者といったイメージもあったらしく、『枕草子』では、

位こそなほめでたきものはあれ。同じ人ながら、大夫

の君、侍従の君など聞ゆるをりは、いとあなづりやすきものを、中納言、大納言、大臣などになりたまひては、むげにせくかたもなく、やむごとなうおぼえたまふ事のこよなさよ。

（『枕草子』第一七九段「位こそなほめでたきものはあれ」　三一五頁）[16]

と評されている。

『源氏物語』少女巻では、内大臣が大宮邸から雲居雁を引き取る直前の様子を語る際に、内大臣に付き従って大宮邸にやって来た内大臣の子息たち（雲居雁にとっては異腹のきょうだいたち）が、以下のように列挙されている。

内の大殿の君たち、左少将、少納言、兵衛佐、侍従、大夫などいふも、皆ここには参り集ひたれど、御簾の内はゆるしたまはず。

（『源氏物語』少女巻　③五二～五三頁）

当時十四歳の雲居雁の異腹のきょうだいとして、「侍従、大夫」が設定されている。「侍従、大夫」からは元服して間もない、若い貴公子のイメージが看取されよう。

以上のような「大夫の君、侍従の君」の文学世界における登場の仕方を考え合わせると、十三歳の継子の姫君の異腹のきょうだいとしての「大夫の君、侍従の君」という設定は十分ありうるのではないかと考える。「貝合」の世界は、母を異にするきょうだいたちの競い合いという性格も有していよう。[17]

四　さまざまな年齢層の女童たち

若紫巻では、前掲したように若紫と遊ぶ「童べ」に言及されるものの、主に語られるのはヒロイン・若紫である。「貝合」では継子の姫君に仕える女童たちのさまざまな様子がこまやかに語られている。具体的な数字を掲げる記述をめぐり、諸注により解釈が揺れている。あらためて見てみたい。

以下は、蔵人少将が女童の導きにより屋敷に侵入した後、蔵人少将の視界に入ってきた女童たちの有様を語るくだりである。

十四五ばかりの子ども見えて、いと若くきびはなるかぎり十二三ばかり、ありつる童のやうなる子どもなど、手ごとに小箱に入れ、物の蓋に入れなどして、持ちちがひさわぐ中に、[18]　（三ウ）

「十四五ばかりの子ども」は、従来「十四、五歳ほどの女

の子」[19]と解されてきた。これに異を唱えたのが、後藤康文氏である。後藤氏は、十四、五歳ほどの「子ども」というのは当時の社会通念からすると普通には考え難いとし、「十四五ばかり」を年齢ではなく、人数表現として捉えるという新説を提示した[20]。

「貝合」の中には、数字に「人」が付くもの、数字に「ばかり」が付くものがある。この二つの表現の間には明確な使い分けが存したのか。あるいは「～ばかり」は文脈に応じて「年齢」を表わしている場合も「人数」を表わしている場合もあるのか。「十四五ばかり」という言い方を人数表現として捉えることができるのかについて、あらためて確認したい。他作品の用例を参照し、検討する。

数字に「ばかりなる」が付く例は多数存するものの、今回は「貝合」本文で「十四五ばかり」となっているので、この、数字に「ばかり」が付いた用例を主に検討した。結果、数字に「ばかり」が付いた用例は、管見に入る限り、ほとんどが年齢を表わしていた[21]。例えば、以下のごとくである。

・十八、九ばかりの人の、髪いとうるはしくて、たけばかりに、裾いとふさやかなる、

（『枕草子』第一八一段「病は」　三一八頁）

・三十二三ばかりの人にて、いと盛りにめでたくものせさせたまふ。

（『栄花物語』巻第三十六・根あはせ　③三四四頁）[22]

・見れば、廿五六ばかりの男の清げなるぞ、主と思しくてある。さては若き男二三人ばかりにて、わづかに見ゆ。

（『宇治拾遺物語』巻第十ノ十　三二五～三二六頁）[23]

最後に掲げた『宇治拾遺物語』の例は、二つの表現の異なりを端的に示していよう。人数を表わす場合は、数字の直後に「～人」を付けるのが一般的であったと見ることができる。以上の検討から、「貝合」の「十四五ばかり」も年齢を表わしていると解したい。そうすると、直後の本文、「十二三ばかり」も年齢を表わすと解する方が妥当ではないか。「いと若くきびはなるかぎり」を受ける「十二三ばかり」なので、従来人数を表わすと解されてきたのだろう。しかしながら、用例の出現状況からは、年齢を表わすと解する方が自然ではないかと考える。

蔵人少将の視界に入ってきた女童たちは、十四、五歳の者もいれば、十二、三歳の者もいる。「ありつる童のやう

なる子ども」は、（「ありつる童」とは手引きをした「八九ばかりなる女子」だったので）八、九歳くらいの女の子である。「十四五ばかりの～持ちちがひさわぐ」のくだりは、年齢層の異なる女童たちがせわしなく行き来している図として捉えることができる。

「子ども」の理解についても、述べておきたい。いわゆる小児といった意味合いではなく、また自身のもうけた子といった意味合いでもない「子ども」の用例がごくわずかながら見出される。『うつほ物語』の以下の例である。上野宮によるあて宮略奪の計画を知った正頼が、上野宮の計画を阻止しようと逆に計略をめぐらす中、部下に対して次の指示を出している。

「とうりう寺に、上野の親王の、大いなるわざしたまふなるを、政所の男どもやりて、ところ取らせよ。若き子どもやりて、もの見せむ」とのたまふ。

（『うつほ物語』藤原の君　①一五九頁）[24]

この「若き子ども」は「若い娘たち」の意である。「貝合」の「子ども」も、こうした例と通じるものではないか。従来の解釈「女の子」が思い合わせられる。さらに付言すると、『うつほ物語』には、女童の年齢を十五歳以下とするくだりが散見する。例えば、以下のごとくである。

童六人、五位の娘、十五歳のうち、かたち、するわざ、大人のごとく、装束、唐綾の、赤色の五重襲の上の衣、綾の上の袴、袷の袴、綾の袿着たり。

（『うつほ物語』あて宮　②一一七～一一八頁）

『とりかへばや物語』には、美しい姿の十四、五歳の女童が登場する。

よきほどに簾巻き上げて、あざやかなる几帳の帷うちかけて、十四五ばかりなる童のいときよげなる、二藍の単衣に紅の袴あざやかに踏みやりて、帯ゆるらかにうちして、団扇すめる。

（『とりかへばや物語』巻第三　三四八頁）

十四、五歳の女童は、「童」の中ではおそらく最も高い年齢層に属しよう。「貝合」の「十四五ばかりの子ども」はそうした女童たちに言及していると考える。「子ども」としているのは、大人の女房にはなっていない、今の女童の状態を強調したからではないか。

継子の姫君の許では、さまざまな年齢層の女童たちが行き来し、貝合の準備をしている。その中で、蔵人少将を手引きしたり、突然やって来た東の御方の目から貝を隠した

り、みなで観音にお祈りしたりと、「八九ばかりなる女子」（ありつる童）や「ありつるやうなる童」という、八、九歳くらいの女童たちの活躍が顕著である。「貝合」における年齢記述を見ると、この八、九歳くらいの女童たちが女童たちの中では最も年少の部類であろう。この年代の女童が年上の女童たちがいる中で健気に活躍する点も、「貝合」の世界の魅力の一つとなっているのではないか。

おわりに

「貝合」は、『源氏物語』若紫巻の断片を取り込みながら、継子いじめ譚の系譜に繋がる物語世界を形成していた。その発想や表現の活用のあり方は、単純な模倣でもなく、パロディーでもなく、若紫巻の片々を集積し、新たな文脈や物語世界を構築するといったものであった。「貝合」では若紫巻とは異なり、継子の姫君を守る大人の保護者的な人物が姫君の傍らにいない。これにかわり、せわしなく活動する女童たちの姿が活写されていた。継子の姫君と今の北の方の姫君との競い合いは、おのおのの男きょうだいも参加し、さらに外部の者にも援助を求めるという、大掛かりな争いとなっていた。劣勢の継子の姫君を支え、とりわけ活躍していたのは、女童たちの中でも年少の部類であるらしい、この八、九歳くらいの女童たちであった。深謀遠慮があるわけでもなく、ある意味で目先のことに左右され、突発的に行動する彼女たちが、結果的には継子の姫君に幸運を齎したのであった。

蔵人少将は観音を装い、援助をしているものの、この「援助」について、受け取った女童はどのように認識していたと考えられるか、最後にあらためて見つめておきたい。蔵人少将が暁に門のあたりに佇んでいると、昨日の例の女童が走って来た。蔵人少将は懐から「をかしき小箱」を出して女童に渡す。陣野英則氏[25]は、この小箱と直前に語られた準備段階の「いみじき小箱を据ゑて」とを考え合わせ、州浜と女童に渡した小箱とが一連のものであり、それはこの来訪者（蔵人少将）が用意したものであることを示すサインになっていると指摘している。そのことに気づくであろう女童は、観音信仰に冷めた眼差しを向けることになったのではないかと論じている。観音信仰に対するこの物語の姿勢を見極め、当該物語の特質に迫る、非常に魅力的な論であると思う。しかしながら稿者としては、この女童がどのような認識にいたったのかについては、彼女の喜

ぶ反応のみしか語られない物語本文からは、確定はできないのではないかと考えている。州浜を昨日来の来訪者（蔵人少将）が用意したと認めるとしても、この来訪者そのものを「仏の化身」と捉えることも可能ではないかと思うためである。[26]これから、物語の時間が進行し、蔵人少将と継子の姫君との物語が展開していくなら、その将来においてそれは明らかになることだろう。しかし現在の女童にとって、この見知らぬ来訪者はその背景が謎の、全く不可思議な存在ではないか（おそらく、彼の官職が「蔵人少将」であることも知らないだろう。それでもあのような関わり方をすること自体、彼女の幼さを示していよう）。結末部分における女童の心情は、こまかに語られていない。「貝合」は、登場人物の心情や認識について、曖昧な部分を残しつつ、閉じられている。それは、観音による救済の可能性の有無とともに、不可知の部分として残されたと見ておきたい。

注

（1）「貝合」をめぐり、『落窪物語』や『住吉物語』等の継子いじめの物語の系譜につらなる物語として位置づけ、「貝合」の物語としての特色について論じたのが、三谷邦明氏（「平安朝における継母子物語の系譜―古『住吉』から『貝合』まで―」日本文学研究資料叢書『平安朝物語Ⅲ』〈有精堂　一九七九年　再録〉。初出は一九七一年一月）である。三谷氏は「貝合」を、「継母子物語の話型の一断面、瞬間をとりだし、それだけを描く物語が生まれた」と評した。

（2）後藤康文氏が、「貝合」の観音霊験譚としての枠組みについて論じ（「観音霊験譚としての『貝あはせ』―観音の化身、そして亡き母となった男―」〈『堤中納言物語の真相』武蔵野書院　二〇一七年〉。初出は一九九九年）、「色好みの貴公子は、観音の化身へ、そしてついに、彼女たちを見護る亡き〝母〟の視線そのものへと変容した。」と捉えた。

（3）後藤康文「『貝合』を読む―正しい読解のための六つの問題点―」（横溝博・久下裕利編　知の遺産シリーズ４『堤中納言物語の新世界』武蔵野書院　二〇一七年）、他。

（4）井上「『貝合』の〈メルヘン〉―〈無化〉される好色性―」（『堤中納言物語の言語空間―織りなされる言葉と時代―』翰林書房　二〇一六年。初出は一九九六年）

（5）厳密に言えば、「単純な模倣」というのはそもそも存在しないと思う。先行する文学的形象を取り込む際、そこには何らかの差異が含まれてくるだろう。「貝合」において注目する事象は、その取り込みと展開の相において特異な

あり方を示しているのではないかと考えている。

（6）『源氏物語』の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）に拠る。

（7）「貝合」の本文は久邇宮本（古典研究会叢書第二期（国文学）『堤中納言物語　久邇宮本』汲古書院）を底本とし、他本により私に校訂したものを用いる。

（8）若紫巻には「貝合」においてキーワードとなる「かひなし」（「かひなくて」）の語も見える。

（9）稲田利徳『人が走るとき　古典のなかの日本人と言葉』（笠間書院　二〇一〇年）が、古典文学の中の「走る」行為に着目し、論じている。

（10）もちろん「貝合」では当該の「女子」の「走る」動作に言及する以前から、「童べ、四五人ばかり走りちがひ」と童たちの「走る」動作への言及がある。一編を通して童たちの「走る」動作は複数回出てくるので、年少の仕える者たちのせわしない姿をかたどるものとしての役割も見出されよう。

（11）姫君側の大人として、「姉君」（承香殿の御方か）の存在が確認されるものの、別々に暮らすきょうだいであるらしいし、母や乳母的な存在ではないので、やはり保護者的な役割を果たす存在は（実父をのぞいて）皆無であろう。

（12）女童は、この姫君について「上との御方の姫君」と呼称している。「上と」（ただし、久邇宮本は「うゑと」と平仮名表記）の個所については、「今」の誤写と解する説（稲賀敬二校注・訳　新編日本古典文学全集『堤中納言物語』〈小学館　二〇〇〇年〉四四七頁、頭注一六）に従う。「今の北の方の姫君」の意と捉えたい。「今の北の方」ということは、女童の仕える姫君の母が死去したあとに、この人物が「北の方」になったのではないかと推測する。今の北の方一家と女童の仕える姫君とは同居しているので、実母の死後、姫君とその弟はこの屋敷に引き取られたのではないか（母君亡き後に、継母と同居するようになったことは、三角洋一氏〈講談社学術文庫『堤中納言物語』講談社一九八一年〉がすでに推定している）。なお、このきょうだいには「承香殿の御方」という姉君がいるようなので、この姉君は母の生前に入内したのではないかと推測する。

（13）清水泰氏（『堤中納言物語評釋』文献書院　一九二九年）や松村誠一氏（日本古典全書『堤中納言物語』朝日新聞社一九五一年）が、本文を「大夫の君・侍従の君」とし、女房の呼名としている。「女房」と解するのは、諸注一致している。

（14）もちろん、従来、大人の女房たちが加勢する北の方の姫君と、若君のみしか味方のいない継子の姫君という、大人と子供の対比が読まれてきた。本稿では、それぞれのきょうだいたちをも巻き込むかたちでの対立の構図として読み取ってみたい。

（15）『とりかへばや物語』の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）に拠る。

(16) 『枕草子』の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）に拠る。

(17) 継子の姫君の味方の身内、同腹のきょうだいとして、女童の発言の中の「姉君（後出する「承香殿の御方」か）」もいる。きょうだいの連携によって、各陣営が勝利を手にしようとしている図を読み取りたい。

(18) 「子どもなど、手ごとに」と校訂した個所は、久邇宮本その他では「こともなとしてことに」となっている。注（3）の後藤前掲論文が、「し」を衍字とみて抹消し、本文を「手ごとに」と改訂することを提案している。従いたい。

(19) 多少の表現の異なりは存するものの、この方向で一貫している。

(20) 注（3）の後藤前掲論文。陣野英則「観音信仰を虚仮にする―「貝あはせ」論―」（『堤中納言物語論　読者・諧謔・模倣』新典社　二〇二二年。初出は二〇二一年）も、後藤論文の提案に賛同している。

(21) 『日本書紀』巻第二十六・斉明天皇六年の記事の中の割注に「～以下卅七人、幷五十許人」（日本古典文学大系新装版『日本書紀』下　岩波書店　三四五頁）という文言がある。この「五十許」は年齢ではなく、人数を表わす。直前まで人数のことを話題にし、「幷」とあるので、ここは「許」で受けながらも人数であることが自明なのであろう。

(22) 『栄花物語』の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）に拠る。

(23) 『宇治拾遺物語』の引用は、新編日本古典文学全集（小学館）に拠る。なお、新編日本古典文学全集の底本は古活字本である。陽明文庫本を底本としている新日本古典文学大系（岩波書店）では、当該箇所が「見れば、廿五六斗の男の清げなるぞ、主とおぼしくてある。さては、若き男二三ばかりにて、わづかに見ゆ」（二六一頁）となっている。「二三」の部分には校注者によって、「ふたりみたり」と読み仮名が付されている。「人」の表記の無い人数表記の例である。今後さらに検討を続けたい。

(24) 『うつほ物語』の引用は新編日本古典文学全集（小学館）に拠る。

(25) 注（20）の陣野前掲論文。

(26) 蔵人少将が用意した州浜に結びつけた「白波に」歌が「手はいと小さくて」と描写されている点にも注目したい。『宇治拾遺物語』巻第二ノ四において、蔵王権現の神威を示す際、「小さき文字にて『金の御嶽、金の御嶽』とことごとく書かれたり」（七一頁）と語られている。神仏の言葉を伝える「小さき文字」という発想が存した可能性も考えたい。

（本学日本語日本文学科准教授）